

《短歌》

― 全体講評 ―

十代から八十代以上の方々まで幅広い年代層の応募作品があり、それぞれの人生に向き合いながら、心に残る生活風景や感慨、人への深い想いをうたった詠草に出会うことができました。初々しい清新な抒情に充ちた作品があり、父母や子どもたちへの深い想いをつづった作品があり、自らの人生をふりかえりつつ歩みを進める作品がありました。さらに災害や戦争に真摯なまなざしを注ぐ作品が、現代に生きる私たちの想いと深くつながっていると思いました。

また、応募作品には、伝統をふまえた写真詠をはじめとして、新しい着想と表現に取り組んだ作品や、フレッシュな口語歌まで多彩な表現が見られ、短歌表現の豊かな可能性が示されました。三十一音律からなる短歌は、暮らしの中のひとこまを文学作品として定着できます。皆様が短歌に親しみ、創作されることを願ってやみません。

山田 吉郎

【最優秀賞】

正月は帰れないから会いに来て役目かわる産声の風

武藤 直樹

― 講評 ―

新しい生命の誕生を契機に、それまでの家族のあり方や役目に移り変わる欲びが生き生きたわれている。下の句が新鮮でさわやかな風を感じる。

【優秀賞】

三陸の防潮堤は高高と海を隠すも悲しみ消せず

相川 和子

― 講評 ―

被災地に防潮堤が高く築かれているさまをうたう。下の句の、海が隠されても悲しみが消えないという端的な表白に、作者の深い感慨が込められている。

【優秀賞】

何ひとつ変わらぬ日々の晴曇に年金男は傘振り歩く

梅林 栄司

― 講評 ―

年金を受給する一人の男性の日常をさりげなくうたう。変わらぬ日常を自然体でつづる軽みのあるうたい方がよい。「晴曇」と「傘」の対応も技巧的。

【優秀賞】

刈終へし手鎌を研ぎて稲穂添へ神棚に納め田仕舞ひとする

遠藤 寛

― 講評 ―

昔ながらの農家の田仕舞いの光景が、郷愁を誘う雰囲気の中で印象深くうたわれている。歌の調べもよく心惹かれる作。動詞の多いのが若干気になる。

【優秀賞】

ゆつくりとたどる弧線・消失点今年デビューのひとり豆まき

斎藤 慶子

—— 講評 ——

上の句の表現がたいへんにユニークで新鮮な印象を与える。今年はひとり豆まきになったという感慨が豆の動きを追うまなざしにあらわれている。

【優秀賞】

正月のサッカーざんまい反省す一月八日の太陽まぶし

渡邊 陽太

—— 講評 ——

リズムのよい作品。正月の休みをサッカーに夢中になり、新学期の朝が訪れた時の気持ちをうたう。反省しつつも充分に楽しんだ充足感も感じられる。

俳句

― 全体講評 ―

世界の遠くでは戦争が継続し、日本では能登に又豪雨災害が起き、地震被害の復興を妨げ、不足と高値の米騒動やコロナは隠れ、インフルエンザの流行を活発化させています。が、次第にマスクの人が少なくなるように、地球上の出来事が詩に与える影響は応募作品の季語とその内容を観る限り薄れ、より身近な日常が戻って来ている様です。今年度は昨年より十名多い八十二名の方の応募を戴きました。私は「俳句は対象の真実を印象として表現する詩である」と考えています。今回も沢山の良い句がありました。が、単なる写生や報告ではなく、こと（例…平和）をもの（例…鳩）で表現する詩情の感得される作品を選びました。次回もまた応募下さいますよう宜しくお願い致します。

梶原 美邦

【最優秀賞】

露天風呂掬う手の中今日の月

古木 せつ子

― 講評 ―

この句には「露天風呂」の後に「の湯を」が、又「中」（位置詞）の後に「に」が省略されています。湯に映った月を掌中にする美的な寛ぎが感じられます。

【優秀賞】

何奴と近づく鳶や風

河村 笑

― 講評 ―

折角気分よく空に輪を描いていたのに、見慣れぬもの（いかのぼり）が現れてきました。正体を見届けようと接近して行きます。互いの話が気になります。

【優秀賞】

花野来て老女少女に変身す

高津 茂々乃

― 講評 ―

嫌がるお婆さんを誘い出して、花野に行きました。するとどうでしょう、姿勢も足の運びもしゃんとして、お婆さんは昔の花野へ入って行きました。

【優秀賞】

大花野風の吹くたび消える径

近藤 昭子

― 講評 ―

花野が見渡す限りの広がりを見せて、心が全て解放されてゆきます。が、突然風が立ち、花野の一本の細い径が消えます。急に不安が忍び込んできました。

【優秀賞】

手をあわす肩のあたりへ初日かな

貴家 香

― 講評 ―

海からの初日を拝みに出かけました。暫く待つと水平線が輝き始めます。眼を瞑って、合掌し、平安を祈る肩に、陽の差し伸べる掌の温さを感じました。

【優秀賞】

母の忌や福寿草みな咲き揃ひ

中浜 智枝

― 講評 ―

福寿草は元日草とも言われます。この花を生前こよなく愛した母の忌。集まった親族の声かけに、福寿草は母の静かな、温かい微笑みで応えておりました。

【優秀賞】

咳の娘や習い始めのギター弾く

鈴木 眞理子

― 講評 ―

ギターを習い始めて、暫くし、娘は風邪を引いてしまいました。無理するなど言っても、咳をしながら練習します。楽器の虜になってしまったようです。

【優秀賞】

山頂や神の額に小鳥来る

長谷部 誠一

― 講評 ―

山頂にはデウスやヘラクレスや日本武尊等の石像が安置されています。「神の額」とはそれらの石像の額の事でしよう。小鳥が神と遊びに遣ってきました。

【優秀賞】

媼らの嬰囲みある小六月

高橋 敦子

― 講評 ―

「小六月」とは陰暦十月の異称で、穏やかな小春の頃です。こんな日和に唆されたお婆さんたちが通りがかりの嬰兒を微笑で囲んで、褒め合っておりました。

「川柳」

― 全体講評 ―

川柳が描く世界はとても広く、特に時代を敏感にとらえます。物価の高騰・米大統領の交替劇・AIの台頭など世相への疑問や腹立ちを、叫ぶのではなくユーモアのエッセンスを加えて一句にする皆さんの姿がうかがえました。

今年度は参加者の年齢がバラエティーに富み、作者が身の周りに起こったことへ心が揺れる様子が鮮やかに句に投影されています。この振幅こそが実は作句の原動力です。それぞれの句から迷いも決意も伝わってきました。

さて、川柳は人間を詠む定型詩です。五七五の全十七音がリズムを奏でます。指を折り折り、そのリズムを確かめて、できた句を音読してみると更にご自身の中で句が熟成して深みや勢いが生まれてきます。ぜひお試しください。

やまぐち 珠美

【最優秀賞】

青い春体育館に置いてきた

浜田 留那

― 講評 ―

ひとつの時代との決別を鮮明に描写しました。「体育館」に置いて来た青春の汗。人生にとって、次の季節への一句です。ますますのご活躍を！

【優秀賞】

なにもかもスマホに尋ね減る会話

安藤 美佐子

― 講評 ―

世相をズバリと詠みました。問題解決にまずスマホを検索。そこには一方通行の繋がりがありません。「会話」が人と人をつなぐのだ、と訴えます。

【優秀賞】

国民の悲鳴のごとく尖る風

井野 きつき

― 講評 ―

生活に欠かせぬものが全て値上げし続ける昨今を、川柳の視点で描きました。「悲鳴」は「尖る風」。溢れる国民の声を為政者に聞かせたい一句です。

【優秀賞】

思い遣り経緯にして時紡ぐ

小須田 壽久

― 講評 ―

「経緯」は「たてぬき」と読ませていただきました。作者が一番大切にしている心をたて糸よこ糸にして、今も豊かな人生を織られていることでしょう。

【優秀賞】

流れゆく月日が示す真の友

白鳥 花奈

― 講評 ―

仲良しだったはずの友人たちが、月日の中でそれぞれ変わっていくことを受け入れて、作者にとつての「真の友」を見つける道のりが表現されました。

【優秀賞】

看護師の母にあげたい努力賞

柚奈

― 講評 ―

お母様の働く背中をずっと見てきた作者の素直な表現が、読む人の胸を打ちます。「努力賞」という語の中にお母様の毎日の姿が浮かんできます。

【優秀賞】

病にはやさしい言葉処方箋

典子

― 講評 ―

「処方箋」に川柳の切り口が冴えました。病人への言葉に深い配慮がうかがえます。真の快癒は心の中からののだ、と作者は伝えています。

【優秀賞】

花が散る咲く時ほどに騒がれず

村井 英雄

― 講評 ―

散りゆく花に見入っている作者。経験の重みが、その花を見届けます。句末の中止法、倒置の表現が散る花の風情をも表しました。着眼の鋭さ。